

ハイデルベルク大学の日本研究

ウォルフガング・シャモニ (ハイデルベルク大学)

ハイデルベルク大学の日本学科が西ドイツの現状を代表するとは思わないのですが、一応僕の研究室を中心に報告させていただきます。西ドイツには目下15の大学に日本学科がありますが、ほとんど一人か二人の教授しかいない小さな研究室です。西ドイツは地方分権が強く、大学はすべて国立ですが、大学運営はそれぞれの州の文部省の管轄下にあります。最近では日本に対する興味が強まり、それぞれの州の文部省が競争して日本学科を設置し、又従来の日本学研究室を拡大する傾向にあります。その新しくつくられた研究室の中に僕の勤めている研究室も入っていて、二年半前につくられたものです。その後はトリーア大学、デュッセルドルフ大学にもつくられ、南ドイツのエアランゲン大学にもつくられるという話があります。又小さな研究室だったマルブルク大学の場合には、大幅に拡大し、一つの日本研究センターをつくらうとしています。そしてドイツ語圏で一番古い日本学研究室であるハンブルク大学のそれも、社会の要求に応じて拡大の方向にあるということです。

現在日本学をやっている学生は全国で約3000人と計算されていますが、実は言葉だけを勉強する学生と、日本学を主科目又は副科目として勉強する学生を全部合わせて3000人です。ハイデルベルク大学の日本学科は新しいので、まだ学生数も少ないです(1988年現在100人ぐらいの学生です)。そしてこういう小さい所は、主任教授の個人的な方向づけによってかなり左右されるから、やむをえず自分のことも話す必要

があるかも知れませんが、どうかお許しください。それでも何か西ドイツの状況を知る参考になるかと思っております。

西ドイツの日本学はご存じかと思いますが、文献学的な傾向が強く、僕個人はむかし一時それに非常に反発したこともありました。今は長い間大学で教えてきてそのよさもわかり、又年をとって段々と保守的になったこともあってか、それほど悪いとは思わなくなりました。

西ドイツの日本学はたしかに現代日本、特に社会科学に対する開眼が非常に遅かったのです。早いところは15年位前からで、遅いところはまだ始まっていないのです。シンポジウムでオーストラリアのネウストプニーさんがお話しされたように、15年位前から、第二パラダイムへの移行が始まったのですが、そこは西ドイツにも妙に当たっていると思います。

新しいパラダイムに移り始めたとはいえ、現在もまだまだ社会科学系は不当に冷遇されているといえます。僕自身は文学研究の方ですが、それでもこれはよくないと思います。もっとも、研究者や学生達が手をこまねいていたのではなく、1960年代後半学生運動がはげしかった時、既成の日本学が社会科学系の研究を殆ど無視していたことに対して、若手の研究者や学生達の不満が爆発し、その後もそれなりの努力を重ねてきたわけです。そしてその結果もあって、例えばボン大学とベルリン大学、それに外国ですが同じドイツ語圏のウィーン大学で社会科学系の研究が強くなっています。もっともウィーン大学の場合はこのような傾向は昔からあったのですが。

又一方、日本学の遅々たる発展にあき足らず、社会科学系の諸科目の中で、場合によっては日本語ぬきで日本研究をする人が出てきました。そして去年はそういう人々と日本学の中で日本社会・政治・経済をあつ

かっている人々が一緒になって、「社会科学系日本研究者の集い」という組織をつくり、今年の秋あたりはじめてのシンポジウムをやるということです。

文学・歴史の分野はどうしても言葉に頼るものですから、自然それほどオープンになれないのです。僕たちの世代が期待していた、比較文学研究や一般文学研究との積極的な交流は思うようになっていません。これは日本学側の努力が足りないということもありますが、西ドイツの大学では比較文学研究などが普通それぞれ英文学、仏文学などの中でなされているということも原因になっております。

さて自分のことを言うのは恐縮ですが、ある程度西ドイツの日本学の歴史と関連がありますので、簡単に述べさせていただきます。僕は1962年からボン大学で日本学を勉強したのですが、その当時ボン大学は西ドイツで、現代日本語を積極的に教える数少ない大学の一つでした。僕は入る時にそのことは知らなかったのですが、運良くそこに入れて、その御陰で今ここに座っています。研究室の教育内容はむしろ古典文学中心の伝統的な日本学でしたが、幸いに早くから、いろいろな専門の日本の学者と友人になることが出来て、そういう人たちから多大な影響をうけたのです。その時、丸山真男の著作にめぐり会ったということも僕のもの後の方向決定に大きな力になりました。

しかし僕の中心的な興味はやはり文学だったので、1966年に早稲田大学に留学したときには、江戸文学を勉強したのです。当時のドイツでは、近代日本関係の研究テーマはほとんど考えられないような時代でしたから、自然に近世文学になったわけです。そして1968年に帰った後、一応日本で勉強したことをまとめて「山東京伝の洒落本」という博士論文を完成しました。それはあきらかにまだネウストプニーさんのいう第

一パラダイムに属する仕事でした。

第二のパラダイムの特色は近代化に対する関心が強いということですが、僕の場合は文学研究にとどまりながら、やはり日本に於ける「文学の近代化」に関心がうつり、幕末・明治初期の文学史の勉強をはじめたわけです。ところでこの文学史的に非常に重要でおもしろい時期は作家論、作品論に偏っている日本の近代文学研究ではかなりかるく見られるか無視されてきており、そこはその時代の問題を深く掘り下げている日本の歴史研究と鮮やかな対照をなしています。僕は「文学の近代化」を考え出してから明治初期の戯作とか政治小説などに取り組みはじめたわけですが、遠い見通しとしてあの時代の「文学」概念の変遷、諸ジャンルの比重の変化などを、その構造的相互関連において理解したいと思っております。

それで、まだ一部だけしかまとまらないのですが、近代文学成立期の諸段階を体現し封建時代から近代へと移行した時代の一応の終結を画する北村透谷の文学への道（自由民権運動から恋愛体験とキリスト教入信へ、またそこから文学へという過程）の、社会史的精神史的分析を試みたものを1983年に発表したわけです。

ハイデルベルク大学の日本研究室は1985年10月に設立されたまったく新しい研究室で、ゼロからの出発でした。本は一冊もなく、本棚もなく、椅子さえもなかったのです。しかし学生は押し掛けてきました。もっともハイデルベルク大学にはそれ以前にも中国学科の中に小さな日本語コースがあったのですが、週二時間程度のものでした。又戦争中には日本語の通訳の養成がころみられたようで、当時講師をつとめたのは言語学者の岩倉具実でした。今度は正式な日本学科が出来たのですが、ゼロからの出発で、初代教授の僕にとっては荷のかち過ぎる大変な仕事

でしたが、反面、研究室を自分が良いと思う方向に引っ張っていけると
いう利点もありました。

それで自分のいままでの経験、特に従来の日本学への不満をプラスに
生かしていこうと思ったわけです。その際僕が何よりも大事だと思った
のは、学問というものをすべて出来上がった既成のものとして与えるの
ではなく、一人ひとりの人間が具体的な歴史的・政治的な状況の中で、
その状況に対して責任も持ちながら自分の学問を新しく探って築き上げ
るという方向に持っていくことです。学生はすでにドイツの中で日本人
とか日本文化にぶつかり、また日本に留学してそこで日本のさまざまな
ものに触れるわけですが、その際、先入観のない好奇心を持って、人と
会い、広くモノを体験して、そのあとそれを、たしかな学問的方法によ
って頭の中で整理していくという過程をとらせたいと思うわけです。

文学研究というものはもとより現実の僅か一部を把握して整理するだ
けで、しかも従来の文学研究では十分目の届かなかった分野（例えば口
承文芸とか大衆文化とか）もいろいろあり、もし最初から出来あがった
専攻科目の方法で取り組もうとすれば、学術的に一見立派に見える成果
はあがるかも知れませんが、重要なものが失われていくという心配があ
ります。ですから僕は今では方法論を重視した昔とちがって、広い好奇
心をもって具体的な現実に接するような姿勢（主体性をもって対象にせ
まる姿勢）を何より大事と思うようになりました。

森鷗外が明治 35 年に「洋学盛衰を論ず」という面白い講演を軍人の
前でやったのですが、その中で当時の日本ではヨーロッパに学ぶことは
もうない、学ぶとしてもせいぜい専門的なものだという主張が盛んに言
われていたのに対して、鷗外は、箆箆を背負って行ってその引き出しに
その地の学問を詰め込んで帰ると言うのは駄目だ、その地で自分で箆箆

をつくるべきなのだ、ということを書きました。つまり専門的知識を既成の理解力で集めるのではなく、理解力そのものを具体的な現実との接触を通してつくりあげていくべきだといっているわけです。僕にはこの鷗外のような姿勢は異文化に接触する際非常に大切だと思うのです。

そのような立場からハイデルベルク大学の日本学科のカリキュラムは余り細かい規定はさけて、出来るだけ学生の主体性を生かすように組まれています。先ず最初の二年間は割合厳しい日本語教育があり、それと並行して基礎ゼミがあって、学生は語学力の基礎と日本に関する基礎的な知識を身につけることになっています。西ドイツの大学の文学部系の学生は誰でも主科目を一つ、副科目を最低一つと複数の科目を専攻せねばならず、副科目といえども高度の成果をあげることが要求されますので、学生の負担はかなり大きいといえます。

その二年間の基礎教育のあとで、いわゆる中間試験があり、それを通ったあとではじめて「本科」に入り、専門的な勉強をしながら自分のこれからの方向をさぐるわけです。又、日本留学のチャンスも出て来ますので、殆どの学生が奨学金なり自費なりで日本に行くのもこの時期です。中間試験の後、三年目ぐらいで修士論文を書き、修士号を取得します。ハイデルベルク大学の日本学研究室はまだ新しいので、修士号をとった学生は一人もいませんが、あと二年ぐらいで最初の人が出るでしょう。

日本学などでは修士号を取得することが即ち卒業となるのですが、卒業した大部分の人はなにかの職につくことになります。そしてわずかに一部の人がドクターをねらってさらに勉強を続けるのです。

さて、研究室のスタッフのことですが、現在、僕以外に四人おります。そのうちの二人は日本語教育に携わっている日本人講師で、他の二人は助手です。そして助手のうち一人は図書室の仕事を専門的にやっております。

ます。今は学生の数に比してスタッフの数が少なすぎるのですが、建設途上の研究室ですので、近いうちにもっとスタッフの数は増えるはずで
す。

それでは研究室としてどういう研究計画があるかということですが、
まだ発足したばかりですから、具体的なものはなにもなくすべてこれか
らのことです。もっとも、すすめたい計画はいくつか考えていて、その
うちで準備段階に入っているのは『日本人の自伝』というものです。そ
の際「自伝」をあらゆる Selbstzeugnisse、つまり「自己記録」の中で
考えたいので、先ずひろく自伝、手記、書簡集、日記等を、筆者が有名
であるか無名であるかを問わず、集めていく方針です。「自伝」は普通
自我の確立とつながるものなのでヨーロッパ固有の、しかも近代のもの
と思われがちですが、日本には近代だけでなく明治以前にも特殊な「自
己記録」の歴史があります。たとえば平安時代の『蜻蛉日記』や『更級
日記』はりっぱな自伝であり、そういう伝統が、一時は消えたとはいえ、
江戸時代にはまた新しく出てきます。そして明治中期ごろヨーロッパの
影響を受けてまた別な自伝の歴史が始まるのです。日本にはこのように
非連続的な自伝の歴史があると思うのですが、日本の研究者のほうは、
自伝を個別的にあつかった研究は勿論ありますが、その全体を比較文学
的な視野から見たものは、管見に入った限りではないようです。

ですからその辺のところで、僕たちがヨーロッパの文献を十分に利用
できる立場にあるという利点を生かして、日本の自伝の歴史を比較文学
的な見地から総合的、体系的にみるということ少しだけ特殊な貢献が
できるのではないかと思うわけです。もちろん日本の研究者も日本の自
伝をよくヨーロッパのそれと比較するのですが、それらは非歴史的にま
た散発的になされることが多く、しかも例外なく 18 世紀以降の自伝が

比較の対象とされるので、日本のケースを理解し、分析するたすけには
ならないと思います。

ところでヨーロッパの自伝の研究にはドイツ語で書かれた全八巻の膨
大なすぐれた研究書があります。G. Misch の『自伝の歴史』(1907-
1969) というもので、古代のギリシャから 18 世紀のころまでのヨー
ロッパの自伝を研究したのですが、とくに古代からルネッサンスまでの
自伝の研究は詳細をきわめております。僕はこの本に非常に刺激を受け
たのですが、この本を出発点にして日本の自伝を見ていきたいと思っ
ているわけです。そしてこういう研究計画を通して、文学研究とか歴史
研究とかの個別的な科目の束縛を克服して日本学としての可能性を発揮
できるのではないかと思うのです。もっとも具体的な成果があがるのはま
だ何年先かわかりません。

その他は、図書室に二つの小さな特別文庫をつくることを始めました。
一つはドイツ文学の日本語訳を計画的に集めることです。明治文学や大
正文学は、翻訳文学を抜きにしては考えられません。そういう意味です
ぐれた翻訳文学も日本文学の一部といえるのです。僕は以前からドイツ
国内のどこかで計画的に集めるべきだと考えていましたので、ハイデル
ベルクで始めたわけです。もう一つは広島と長崎の原爆関係の資料を集
めることです。僕は二度ほど原爆文学のドイツ語訳の本を出したことが
あるのですが、それが縁になって広島の人々から研究室に原爆文
学やその他原爆関係の資料の寄贈を受けるようになったのです。これら
二つの特別文庫も学生の勉強の刺激になると思いますし、またそのうち
から小さな共同研究もできるのではないかと思うのです。

日本から遠くはなれたドイツの日本研究はただ単に日本の国文学研究、
日本史研究などの既成科目のドイツ語版であってはならないと思います。

何よりも重要なのはドイツから出発して日本との距離を認識しながら、それをこえて日本を理解し、そして理解したことを又もとのドイツにもちかえるということです。それで、一、日本との言語的、文化的距離を認識すること、二、自分がおかれている社会的、文化的状況を認識すること、この二つの条件が「日本学」の基礎条件だと思っています。従来のアカデミズムは、この二つの条件を十分に考えずにまっすぐ専門的な研究に飛び込んだわけですが、その結果一般社会と遊離してしまい、例えば一般にも益するところのある日本語からドイツ語への翻訳などが十分顧みられなかったということになりました。

少し古い資料ですが、手元にある 1973 年のユネスコの統計をみますと、一年間の翻訳の出版点数（単行本）は、西ドイツが 6500 点に対してスペインは 4500 点、ソ連は 4400 点、日本は 2300 点で第四位という順序になっていますが、小さな東ドイツでも第九位ですから、この時点でドイツ語はあきらかに翻訳語として世界一といえます。ところが日本語からの翻訳に限っていえば、ドイツ語はおそらく英語、フランス語、ロシア語、中国語等などのずっとあとに位置していると思います。それは西ドイツの日本研究者のアカデミズム、つまり一般社会に対する責任の軽視の結果だと僕はみています（最近たしかにこの傾向が修正される兆しがみえてきました）。

現在西ドイツの日本学の置かれている状況には、一方にアカデミズムがあり、又一方にはせっかちな経済順応主義があります。昔はあまり日のあたらぬ小さな科目であった日本学が最近では学生数が急に三倍か四倍に増え、又社会（といっても主に政治家や経済界の人）からの好意（それも過大な期待のこめられた）を受けるようになりました。それに應える必要もありますが、それに順応してしまうのは大変危険だと思

ます。大学の科目としてはやはりもう少し長い目で教育して、いろいろな職場で両方の文化の間の「通訳」になるような人間を育てたいと思います。その際は、実際的な要求から少しはなれた文学研究も確かに一つの意味があって、あるいは却って長期的に社会の要求に応えられるのではないかと、思っています。

(1988年3月)

付記

1988年3月に小さな会合でおしゃべりしたものがいま活字にされるということなので、表現など大幅に変えさせていただいた。この二年半のあいだに西ドイツの日本学はますます拡大され、又いろいろな動きもあったので、実はまったく新しく書くべきだと思われるが、一応内容は当時のままにさせていただいた。